

「梓弓説話」変容の一過程：『直談因縁集』の水害 伝承へ

森, 誠子
九州産業大学：准教授

<https://doi.org/10.15017/4402932>

出版情報：語文研究. 129, pp.1-10, 2020-06-25. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

「梓弓説話」変容の一過程

— 『直談因縁集』の waters 伝承へ —

森 誠 子

一、はじめに

梓弓説話とは、「梓弓」「無き人数に入る」等の歌語を持つ和歌を詠んだ理由として、逆修（生前）供養を希望するといふモチーフを持つ説話を指す。詠み手は、無名の女性をはじめ源為義や楠木正行等の武将であり、中世末期以降には和泉式部と記されるようになる。そして梓弓説話は、『平家物語』・『源氏物語』の後出諸本、『平家物語』・『源氏物語』の延慶本をはじめ、『保元物語』の生成と展開の中心に、これらを中心にして、『三国伝記』に記されること、これらと同時代に成立した『三国伝記』に記されること、これらと同時代に成立した『三国伝記』に記されること、これらと同時代に成立した『三国伝記』に記されることを目的に、これまで論じられることが多かった。^{〔注1〕}

『三国伝記』に記される、梓弓説話のきつかけとなる入間川

の waters 伝承は、『発心集』にも、梓弓説話は記されないものとして記されている。近年、この類話を新たに確認した。天正十三（一五八五）年写の直談系法華経注釈書である『直談因縁集』^{〔注2〕}である。それらを考えると、梓弓説話に関する言説は、軍記物語諸本の展開と並行して、waters 伝承と結び付いていった流れも確実にあることが見て取れる。となれば、梓弓説話に関する言説の受容と変容を総合的に解明するためには、軍記物語からばかりといった一方的観点ではなく、『発心集』『三国伝記』『直談因縁集』に記された言説の享受の歴史性・同時代性も考慮しつつ、軍記物語諸本における言説の展開とどのように連関し合っていたかという観点も加え、双方向的に考察を行わなければ、梓弓説話の具体的な生成基盤と流布の解

明にも繋がらないだらうと考える。

そこで、まず本稿では、これまで梓弓説話を記す文芸テクストとして研究の俎上に上ってこなかった『直談因縁集』を基軸に、入間川の水害伝承を記す『発心集』『三国伝記』との関係を明らかにすることで、歴史事象を伝える営為と文芸テクストの言説展開との一様相について明らかにしていく。

二、『直談因縁集』に記される水害伝承と梓弓説話について

日光輪王寺の天海蔵として伝来している『直談因縁集』は、天正十三年に天台僧である舜雄により書写された直談系法華経注釈書である。この『直談因縁集』巻三第二十一話には『発心集』『三国伝記』と同類の水害伝承を記している本文が、以下のように収められている。なお本文は、私に書き下し、補った仮名と訓読した助動詞は平仮名で記し、適宜濁点を施した。

武蔵ニ、観修ト云ふ人アリ。折節、雨降ルなり。五月雨ノ事ハ、言語道断降り、水増スなり。而して、夜半比、尚々雨ガツヨク降ルなり。時に、耕作ヲ仕ル人ナレバ、池ヲ構ゆるなり。時に、堤ヲ押し切らシ、ト云ひテ、若キアタリノ人ヲ起こすナド仕ル。見レバ、東西闇にシテ

見えず。去りながら、河上ヨリ白妙ニ水、押し来たる。驚キ、妻子などハ家ノ上ニ登リナドスルなり。時に、悉く水ガ入り、大海のごとし。家人ト二人、ヲヨギ、何ナラン高キ処ニモ至ラントスル時、妻子眷属ハ、吾ヲ捨テ、何方ヘト声ヲ挙げテ、雷電、以テノ外なり。サレバ、先づ、一身ガ大切ナレバ、耳ニモ入らず、二人、音ヲ懸ケテヲヨグニ、是モ遙ニ隔テタリ。一人ヲヨグニ、黒キ物見ユル。是ハ大蛇カト思ひ至ルニ、蘆ヲ水ガ押し聚メタリ。是ニシテ、暫ク気^カ休ムルニ、蛇ガ此ニ聚まり、手足ニカラマルなり。サル程ニ、又、命ヲ限りニヲヨギ候ふニ、暁方、陸ニ至ルなり。而して、一人モ又来タル。夜明けテ見レバ、家内ノ眷属ヲ十七人ヲシアグルなり。之を見テ、其ノ任、通世シテ、都ニ上リテ、吾、観音ヲ念ズルニ依リテ、即ち浅きを得^カる処シテ助カル。是、善知識ト云ひテ、一条香^{マコ}堂ノ辺リニ庵ヲ結び、居シテ、過去^{曩脱カ}ヲ作り、念仏ヲ申すなり。サレバ、聞き及ぶ人、来たりテ、各、之に載するなり。有る時、一人女来たりテ、布施ヲ出だシテ、過去帳ニ載セテタビ候へ、ト云々。時に、過去^{「恚」}ミセケチ。「照」を傍書ト云ふハ、死にタル人ノ事なり。貴方ハマダ存生なり、ト云々。時ニ、女、一首云ふ。アツサ弓ハヅルベシトハ思

ハネド無キ人数二兼ねテ入りナント読メリ。サレバ、之に載するなりと云々。

『直談因縁集』は、『法華経』二十八品の順に従いながら、語句に関する注釈を、説話を用いて記す。本話は、化城喩品を注釈する卷三に収められているが、化城喩品に記された語句に関する注釈ではなく、卷三第十八話より記される「廻向ニ付テ」、第十九話「不浄廻向ニ付テ」、第二十話「過去帳ニ付テ」という流れを受けて記されたものである。なお、第十八・十九・二十話は「ニ付テ」と、『法華経』本文の語句の注釈をする形式で記されているが、『法華経』の化城喩品中に該当する語は見られない。なお、本話に記される「即得浅処」は、普門品の本文に見られる。

次に『直談因縁集』の本文を、筋書の順にA～Jとして分け、それぞれ『発心集』『三国伝記』の該当する記述を割り当てたのが、次の表である。

- A、場所
- B、人物名
- C、天候
- D、生業
- E、夜半ごろの様子
- F、妻子等の様子
- G、蛇の出現
- H、明るる日の様子
- I、加護
- J、後日談

E	D	C	B	A
<p>①五月雨ノ事ハ、言語道断降り、水増スなり。而して、夜半比、尚々雨ガツヨク降ルなり。</p> <p>【※①②の間にDが入る】</p> <p>②時に、堤ヲ押し切ラシ、ト云ひテ、若キアタリノ人ヲ起コサナド仕ル。見レバ、東西間ニシテ見えず。去リながら、河上ヨリ白妙ニ水、押し来たる。</p>	<p>時に、耕作ヲ仕ル人ナレバ、池ヲ構フルなり</p>	<p>五月雨ノ事ハ</p>	<p>観修ト云ふ人アリ</p>	<p>直談因縁集</p>
<p>ある時、五月雨日ごろになりて、水いかめしう出でたりけり。されど、いまだ年ごろこの堤の切れたることなれば「ざりとも」と驚かず。かかると、雨、沃こぼす如く降りて、おびたしかりける夜中ばかり、にはかく雷の如く、世に恐ろしく鳴り響む声あり。この官首と家に寝たる者ども、みな驚きあやしみて、「こは何もの声ぞ」と恐れあへて、官首、郎等をよびて、「堤の切れぬると覚ゆるぞ。出でて見よ」といふ。すなはち、ひき開</p>	<p>【※Aの後】</p> <p>大きな堤を築き、水を防ぎて、その内に田畠をシケル在家ノ村（ガリ居タル所）ありけり。</p>	<p>【※A↓D↓Bの後】</p> <p>ある時、五月雨日ごろになりて</p>	<p>【※A↓Dの後】</p> <p>官首といふ男なん、そこ宗とあるものにて、年ごろ住みける。</p>	<p>発心集</p>
<p>或時、五月雨重ぬ日、川ノ水カサ増リ堤ニ等シ。雖然、年来堤ノ切タル事ナケレバ、サリトモト思ヒテ不驚。斯程ニ、車軸ノ如ク大雨ヲ打コボス。雨ノ降リ、黒風天ヲ傾ケ、白水地ニ平也。同時ニ鳴ガ如ク千ノ雷ク動揺スル音アリ。此ノ官首ガ家ニ寝タル者共驚愕シ、「コハ何物ノ官首郎等ヲ呼ビ、堤ノ切タルト云フ。即ち妻戸ヲ押シ開キ、中門ニ出テ見ニ、二三町計リ白々波々海面ニ不異。」「是ハ如何</p>	<p>【※Aの後】</p> <p>大ナル堤ニ、ヲ築水ヲ防、其内ニ田畠ヲ耕作シケル在家ノ村（ガリ居タル所）有。</p>	<p>【※A↓D↓Bの後】</p> <p>或時、五月雨重ぬ日、</p>	<p>【※A↓Dの後】</p> <p>彼、処ニ、官首ト云者。其ノ邑ニハ官首ト云者。家居モ尋常（シテ）住宅セリ。</p>	<p>三国伝記</p>

F	E	直談因縁集	F	直談因縁集	F
驚キ、妻子などハ家ノ上ニ登リナトスルナリ。時に、悉く水ガ入リ、大海のごとし。家人ト二人、ヲヨギ、何ナラソ高キ処ニモ至ラントスル時、妻子眷属ハ、吾ヲ捨テ、何方ヘト声ヲ挙げテ、雷電、以テノ外ナリ。サレバ、先づ、一身ガ大切ナレバ、耳ニモ入らず、二人、音ヲ懸ケテヲヨグニ、是モ遙ニ隔テタリ。	官首ガ妻子をはじめて、あるかきり天井に登りて、桁梁ニ取り付きて叫ぶ。此の中に、官首ト郎等とは葺板をかき上げて棟に登り居て、いかさまにせんと思ひ廻らすほどに、この家ゆるゆると揺ぎて、つひに柱の根抜けぬ。つみながら浮きて、湊の方へ流れ行く。その時、郎等男のいふやう、 「今はかにこそ待るめれ。海は近くなりぬ。湊に出でなば、この家はみな浪にうちくだかれぬべし。もしやと飛び入りて、泳ぎて試み給へ。かく広く流れ散りたる水なれば、おのづから浅き所も待らん」といふを聞きて、幼き子、女房など、「我捨てるぞ」とをめく声、最も悲しけれど、とてもかくても助くべき力な	官首ガ妻子ヲ始メトシテ、家の中ニ有者皆天井ニ上テ。桁梁ニ取付キト郎等一人トハ葺板ヲ搔開テ、棟ノ上ニ居テ、何方ハセント思ヒ廻ラセト、此家ユラユラト、動キ、遂ニ柱根浮リ。家は連キナガラ湊方ヘ流行。(其)時(郎等)男ノ云サレルメレ。海ニ近ク成ヌラン。湊ニ出ナバ、此ノ屋ハ浪ニ打碎(カレヌ)ベシ。若ヤト水ニ飛入遊(意)見給ヘ。角広流シ散タル水ナレバ、自ラ浅キ所モ有ナント云ヲ聞テハ、「我等ヲ捨テ何方ヘ行ゾ」トヲメキ叫ブ声(カクテモ)可キ助カモノシ。我身一ヲ若ヤト思フ。郎等男ト共ニ	官首ガ妻子ヲ始メトシテ、家の中ニ有者皆天井ニ上テ。桁梁ニ取付キト郎等一人トハ葺板ヲ搔開テ、棟ノ上ニ居テ、何方ハセント思ヒ廻ラセト、此家ユラユラト、動キ、遂ニ柱根浮リ。家は連キナガラ湊方ヘ流行。(其)時(郎等)男ノ云サレルメレ。海ニ近ク成ヌラン。湊ニ出ナバ、此ノ屋ハ浪ニ打碎(カレヌ)ベシ。若ヤト水ニ飛入遊(意)見給ヘ。角広流シ散タル水ナレバ、自ラ浅キ所モ有ナント云ヲ聞テハ、「我等ヲ捨テ何方ヘ行ゾ」トヲメキ叫ブ声(カクテモ)可キ助カモノシ。我身一ヲ若ヤト思フ。郎等男ト共ニ	三人伝記	F
心集	心集	三国伝記	F		

G	F	直談因縁集	F	直談因縁集	F
一人ヲヨグニ、黒キ物思ユル。是ハ大蛇かト見ひ至ルニ、蘆ヲ水ガ押し聚めタリ。是ニシテ、暫ク氣 ^② 休ムルニ、蛇ガ此ニ聚まり、手足ニカラマルなり。サル程ニ、又、命ヲ限りニヲヨギ候ふニ、晝方、陸ニ至ルなり。	官首ただ一人、いづちともなく行かぬにまかせて泳ぎ行く。力はずでに尽きなんとす。水はいづくを際とも見えず。今ぞ溺れ死ぬると心細く悲しきまに、 ①かいつべき方とは仏神をぞ念じ奉りける。いかなる罪の報いにかかる目を見るらんと、思はぬことなく思ひ行くほどに、白浪の中にいささか黒みたる所の見ゆるを、もし地かとして見れば、流れ残りたる蘆の末葉なりけり。かばかりの浅りもなかり。ここにしばし力休めんと思ふ間に、次第に悉く纏ひつゝを、驚きてさぐれば、みなく蛇どものこの蘆にわづかに流れかかちり、次第に鎖り連りつゝ、いくらともなく蟠り居	心集	心集	三国伝記	F
心集	心集	三国伝記	F		

H	G	直談因縁集
<p>暁方、陸ニ至ルなり。而して、一人モ又来た。夜明けテ見レバ、家内ノ眷属ヲ十七人ヲシアグルなり。</p>		
<p>船求めて、まづ浜の方へ行き見て見るに、すべて目を当てられず。浪のうち破られたる家ども、算をうち散らせるが如し。汀にうち寄せられたる男女馬牛の類、数も知らず。その中に、官首が妻子ども</p>	<p>たりけるが、ものの触るを悦びて、巻きつくなりけり。むくつけない氣疎きこと、たとへん方なし。空は墨を塗りたらんやうにて、星一つも見えず。地はさながら白浪にて、いささかの浅りだになし。身には隙なく蛇巻きつき、身も重く、動くべき力もなし。②地獄の苦しみをかばかりにこそはと、夢を見る心地して、心憂く悲しきこと限りなし。かかるあひだに、さるべき仏神の助けにや、思ひのほかに浅き所にかき着きて、そこに蛇をばかたはしより取り放ちてけり。とばかり力休むるほどに、東しらみぬれば、山をしるべに、からうして地に着きにけり。</p>	発心集
<p>泣々家、方へ行て見レバ、</p>	<p>波二打破(ラレ)タル家共、算ヲ散セルガ如シ。(汀)打寄ラレタル男女牛馬ノ死骸数モ不レ知。其内、官首ガ妻子共ヲ始トシテ、我屋ノ者共十七人、独不レ散一処ニ死骸共有。泣々家、方へ行て見レバ、</p>	三国伝記

J	I	H	直談因縁集
<p>是、善知識ト云ひテ、 ※【一条香マシ堂ノ辺りニ庵ヲ結び、居シテ過去(無常)ヲ作り、念仏ヲ申すなり。サレバ、聞き及ぶ人、来たりテ各、之に載するなり。有る時、一人女来たりテ、布施ヲ出だシテ、過去帳ニ載せテタビ候へ、ト云々。時に、過</p>	<p>之を見テ、其ノ任、遁世シテ、都ニ上リテ、吾、観音ヲ念ずルニ依リテ、即ち浅きを得^レる処シテ助かる。</p>		
<p>かやうのことを聞き、唯、離の心を発すべし。これを人の上とて、我かかかるといふまじとは、なにの故にかもて離るべき。身はあだに破れやすき身なり。世は苦しみを集めたる世なり。身は危けれど、過去帳ニ載せテタビ候はざらん。海賊恐るべ</p>	<p>【※G中に有り】 ①かこつべき方とは、 ②地獄の苦しみをかばかりにこそはと、夢を見る心地して、心憂く悲しきこと限りなし。 ③是や地獄ノ苦患ナル覽ト(夢ヲ見ル)思(ヒシ)テ、彌持尊ヲ念ジ奉。而も、冥助、有ケルニヤ。</p>	<p>【※G中に有り】 ①カコツベキ方モナシ。唯、観音信仰者也ケレバ、「南無大悲觀世音菩薩」ト一心ニ称名シテ、 ②是や地獄ノ苦患ナル覽ト(夢ヲ見ル)思(ヒシ)テ、彌持尊ヲ念ジ奉。而も、冥助、有ケルニヤ。</p>	発心集
<p>【凡】世上ノ不定、人間ノ無常、皆(以)如此(哉)。其後、官首ハ、親音ノ悲願、即得淺処、生シ、難レ有思ケレバ、出家遁世シテ、在所ヲ不レ定、諸國ノ流浪シ。観音ノ靈地ヲ拜シケル。谷汲・石山・長樂寺、清水・六波羅・六角堂、穴太・成相・長谷・粉</p>	<p>【※G中に有り】 ①カコツベキ方モナシ。唯、観音信仰者也ケレバ、「南無大悲觀世音菩薩」ト一心ニ称名シテ、 ②是や地獄ノ苦患ナル覽ト(夢ヲ見ル)思(ヒシ)テ、彌持尊ヲ念ジ奉。而も、冥助、有ケルニヤ。</p>	<p>をはじめとして、我が家の人者ども十七人、一人失せてありけり。泣く泣く家の方へ行きて見れば、三十余町白河原になりて、跡だになし。多かりし在家、貯へ置きたるもの、朝夕呼び仕へし奴、一夜のうちに亡び失せぬ。この郎等男一人、水心ある者にて、わづかに命来たりけり。</p>	三国伝記

	直談因縁集	三国伝記
<p>去〔恣〕ミセケチ。照を傍書〕ト云ふハ、死にタル人ノ事なり。貴方ハマダ存生なり、ト云々。時ニ、女、一首云ふ。アツサノハヅルベシトハ思ハネド無キ人数ニ兼ねテ入りナント読メリ。サレバ、之に載するなりと云々。〕</p>	<p>直談因縁集</p>	<p>河〔間〕恒〔経廻〕ケルガ、行穽年老後、洛陽、古薙ヲ結テ居住シ、我々古薙。亡者ヲ始トシテ、過去帳ヲ書テ、有縁無縁ヲ〔云ハズ〕訪ケルニ、六時不退ノ勤行無キ。懈時泉。有時、年半ナル女性一人來、錢貨ヲ一連布施シテ、〔我ヲモ〕過去帳ニ入テ給フベシ。ト望ケルバ、〔聖申ケルハ〕、過去帳ニハ去ニシ人コソ奉レ入レ。現在ス人ヲバ如何。ト云ハバ、女〔性〕硯ヲ乞テ、〔自〕我ガ名ヲ書付テ、カク計、梓弓ハヅルベシトハ思ハネバ無キ人数ニカネテ入カナト、過去帳ノ裏ニゾ書タリケル。聖見之、弥道心深シテ、八十有餘之後、向テ西方浄土ニ命終ス。時ニ、瑞花地ニ雨、伎楽天ニ響、紫雲掌ニ満之。現其人前願在之。〕</p>
<p>J</p>	<p>発心集</p>	<p>河〔間〕恒〔経廻〕ケルガ、行穽年老後、洛陽、古薙ヲ結テ居住シ、我々古薙。亡者ヲ始トシテ、過去帳ヲ書テ、有縁無縁ヲ〔云ハズ〕訪ケルニ、六時不退ノ勤行無キ。懈時泉。有時、年半ナル女性一人來、錢貨ヲ一連布施シテ、〔我ヲモ〕過去帳ニ入テ給フベシ。ト望ケルバ、〔聖申ケルハ〕、過去帳ニハ去ニシ人コソ奉レ入レ。現在ス人ヲバ如何。ト云ハバ、女〔性〕硯ヲ乞テ、〔自〕我ガ名ヲ書付テ、カク計、梓弓ハヅルベシトハ思ハネバ無キ人数ニカネテ入カナト、過去帳ノ裏ニゾ書タリケル。聖見之、弥道心深シテ、八十有餘之後、向テ西方浄土ニ命終ス。時ニ、瑞花地ニ雨、伎楽天ニ響、紫雲掌ニ満之。現其人前願在之。〕</p>

まず「A、場所」についてである。『直談因縁集』では、「武蔵」としか言及していないが、『発心集』『三国伝記』ではよ

り詳しく、入間川付近の場所であることを記述している。次に、「B、人物名」について『直談因縁集』では「観修」とするが『発心集』『三国伝記』では「官首」となっている。おそらく『直談因縁集』は『発心集』などの「官首」という音に、別の字を当てたのだろう。このことは、『直談因縁集』の記述が、視覚的な書承としてではなく、聴覚的なものを介在していることを推測させる。それは、直談という「語りの場」で用いられたものであることを裏付けるものである。なお、人物名については、『発心集』及び『三国伝記』は「A、場所」の後に「D、生業」を記述し、その後に「B、人物名」を記しており、『直談因縁集』と記述の順が異なる。次に、「C、天候」についてである。『直談因縁集』で「五月雨ノ事ハ」とあり、『発心集』『三国伝記』もそれに近い記述を持っている。だが、『発心集』及び『三国伝記』は「A、場所」、「D、生業」、「B、人物名」という記述の順のさらに後に、この天候の記述があるため、『直談因縁集』と『発心集』『三国伝記』では、順序が異なっている。次に、「D、生業」についてである。『直談因縁集』では、「時に、耕作ヲつこうまるつル人ナレバ、池ヲ構ゆるなり」とあるが、『発心集』では異なり、「大きな堤を築き、水を防ぎて、その内に田畠を作りつつ、在家多く群り居たる所ありけり」となっており、『三国伝

記』もそれに近い記述を持っている。そして『発心集』及び『三国伝記』は、先述のとおり「A、場所」の後、「B、人物名」の前に、Dの記述が出てくる。次に、「E、夜半ごろ」についてである。『直談因縁集』では、表中に示したように、傍線①・②の間に「D、生業」が入るが、『発心集』及び『三国伝記』に比べると記述が簡略であることがわかる。次に、「F、妻子の様子」についてである。これも『直談因縁集』は簡略に記すのに対し『発心集』と『三国伝記』は詳しく、内容も近い記述を持っていることがわかる。次に、「G、蛇の出現」についてである。『直談因縁集』は『発心集』『三国伝記』に比べ、やはり簡略な記述である。なお、『発心集』と『三国伝記』は、傍線①・②の部分が異なる。この傍線①・②については、後の「I、加護」で言及したい。次に、「H、明るる日」についてである。これも『直談因縁集』は『発心集』『三国伝記』に対し記述が簡略である。次に、「I、加護」についてである。『直談因縁集』では、「之を見テ、其ノ任、遁世シテ、都ニ上リテ、吾、観音ヲ念ズルニ依リテ、即ち浅きを得る処シテ助カル」とある。『発心集』と『三国伝記』では「G、蛇の出現」の中に該当する記述のあることは、先ほど言及したとおりである。なお『発心集』『三国伝記』のどちらも、『直談因縁集』に比べると一見近い記述を持っているように見える。

だが、傍線①・②にあるように『発心集』では念じた対象が「仏神」となっており、『三国伝記』では「観音」となっている。『直談因縁集』は「G、蛇の出現」では特に念じた様子は描かれず、「H、明るる日」の記述の後に、観音の加護であったことを記しており、『直談因縁集』も『三国伝記』と同様に観音信仰の説話であることがわかる。最後に、「J、後日談」についてである。『直談因縁集』では、※印を付して墨付き括弧のような後日談があるが、『発心集』では、話末評語となっていることがわかる。また、『三国伝記』では、まず、官首が観音の利益によって助かったことにありがたく思つて出家した後、西国三十三か所の十か所を巡つたという記述がある。そうして、その後、※印を付して墨付き括弧に入れたが、『直談因縁集』と同様の後日談である「梓弓説話」が見られる。

すなわち『直談因縁集』巻第三十一話に記される水害伝承は、人間川の水害伝承を記す『発心集』『三国伝記』と類関係にはあるが、その記述は『発心集』『三国伝記』に比べ概ね簡略であり、ここにも聴覚的なものを介在する享受の場が想像される。また、記述の順序も、『発心集』『三国伝記』は類似しているのに対し、『直談因縁集』は特異であることもわかった。加えて『発心集』『三国伝記』に記されるような、洪水の中で、仏神や観音の加護から蛇により助けられる、また

その蛇の、人間（『直談因縁集』では観修）を洪水から助けようとする蛇の意思や感情が『直談因縁集』の記述からは見られないように感じられる点や、観修とともに助かった郎等男は、仏神や観音の加護でなく、水泳の能力によって助かったとする点などは、『直談因縁集』の特性と言えるだろう。だが、『直談因縁集』には『三国伝記』に見られる観音信仰及び梓弓説話が記されていた。

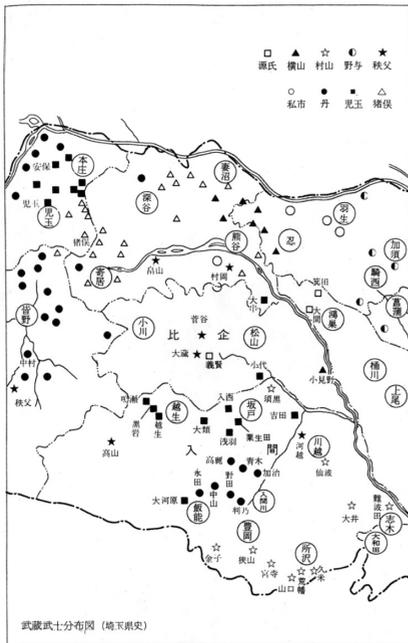
三、入間・川越・仙波について

この入間川の水害伝承について『川越市史』中世編は、次のように説明している。^(注6)

建暦元年（一一二一）十月、「方丈記」の著者として名高い鴨長明が京より鎌倉に下り、三代将軍源実朝に謁したことが「吾妻鏡」に見える。この長明が著わした仏教説話集「発心集」に入間川洪水の記事が収められている。無論説話のことであるから、洪水の具体的な日時や場所については何ら記されていないが、下倉した際、鎌倉の人々から聞かされた実話を素材にして説話仕立てたかとも考えられるのである。（中略）前に述べた通り、「発心集」は仏教説話集であって、世の無常を説いているの

であるが、幾分かの事実を含んでみるとみてよい。ここに言う官首とは頭立つ人の意であるが、入間川沿岸に相当の財産を所有していた人物が住んでいたことを物語っている。さらに、神宮文庫本「発心集」によれば、官首は秩父の冠者と書かれ、より具体的になっている。入間川沿岸の秩父流とすれば、あるいはこの官首は河越氏を示しているかともみられよう。

浅見和彦氏も同様の指摘をしているが、この、入間川沿岸の秩父流の冠者がいたとされる川越（河越）^(注7)及び仙波についての位置関係等を、参考として『川越市史』中世編より引用する。



武蔵武十分布図（埼玉県史）

この入間川の近くに、関東天台の談義所の中心である無量寿寺がある。それについては、渡辺麻里子氏が、次のように指摘している。^{注8)}

中世の東国において、足利学校、金沢称名寺、宇都宮などが、文化の重要な拠点であったことはよく知られている。本稿では、武蔵国仙波及び河越という地に注目してみたい。

仙波は、河越城を中心に城下町として栄えた河越（川越）に近く、太田道真・道灌父子の活躍により、河越・仙波は重要な文化圏となっていた。また仙波には、関東天台の談義所の中心である無量寿寺があった。室町期の関東には、常陸国中郡月山寺、常陸国黒子千妙寺、武蔵国金鑽大光普照寺、下野国二宮宗光寺など、天台宗の談義所寺院が数多く存在して盛んに活動していたが、仙波無量寿寺はその中心的役割を担っていた。本話の舞台が無量寿院にも近いことから、直談の場で本話がどのように用いられていたかなどを確認しようとしたが、管見の限り見出すことはできなかった。後考を期したい。

四、おわりに

軍記物語諸本に記される梓弓説話については、築瀬一雄氏の「太平記の歌は、原形から最も遠いのではないか」という指摘等もあるが、諸本の生成・展開の通史性・同時代性に着目すると、『太平記』には古態本系から梓弓の和歌が見られるのに対し、『保元物語』では古態本系には梓弓の和歌は見られず、室町時代に生成したと目される後出異本に見られる。また『平家物語』では、応永書写延慶本に、宇佐神宮神官の娘の話として梓弓説話が記される。それらと、本稿が論及した『発心集』『三国伝記』から、『直談因縁集』すなわち天正年間に至る入間川の水害伝承及び梓弓説話の様相とを連関させながら考えていく必要があるが、それらは別稿にて論じたい。

以上をまとめると、梓弓説話に関する言説は、『直談因縁集』の出現により、軍記物語諸本が生成され展開していく通史性・同時代性と重なる流れと並行して、入間川の水害伝承と結び付きながら天正年間に至るまで享受されていった流れも確実にあった。このことの意味は大きいと考える。『直談因縁集』は少なくとも一度の転写を経ていることが指摘されているが、『直談因縁集』^{注10)} 原本のさらに以前から、『三国伝記』の

影響を受けた書承だけにとどまらない知の基盤の中で、梓弓
説話が記されたものであると言えるだろう。

注

- 注1 主な先行研究として、以下のものが挙げられる。日本古典文学
大系『太平記』補注（一九六二年、岩波書店）、築瀬一雄『説
話文学研究』（一九七四年、三弥井書店）、池上洵一校注『三国
伝記』下（一九八二年、三弥井書店）、池見澄隆『中世の精神
世界 死と救済』（一九八五年、人文書院）、清水由美子『平家
物語を繙く』（二〇一九年、若草書房）
- 注2 廣田哲通・阿部泰郎・田中貴子・小林直樹・近本謙介編著『日
光天海藏 直談因縁集 翻刻と索引』（一九八八年、和泉書院）
- 注3 『法華経』の本文は、岩波文庫本『法華経』と合わせ、中田祝
夫編『足利本仮名書き法華経』（一九七七年、勉誠社）及び中
田祝夫編・監修『妙一記念館本仮名書き法華経』（一九八八年、
靈友会）を確認した。なお『直談因縁集』巻第三十八話につい
ては、岩崎雅彦「博奕打ちの説話と狂言——『直談因縁集』を
中心に——」『國學院雑誌』第百十四卷第十一号（二〇一三年十
一月）に詳しい。
- 注4 「即得浅処」は『三国伝記』本文に見られ、普門品の本文に基
づくことが、池上洵一校注『三国伝記』下（一九八二年、三弥
井書店）において指摘されている。
- 注5 引用本文は、以下のとおり。浅見和彦・伊東玉美訳注『発心集』
（二〇一四年、角川ソフィア文庫）、池上洵一校注『三国伝記』
（一九七六年、三弥井書店）
- 注6 『川越市史』第二卷 中世編（一九八五年、川越市）

注7 浅見和彦・伊東玉美訳注『発心集』（二〇一四年、角川ソフィ
ア文庫）

注8 渡辺麻里子「仙波に集う学僧たち——中世における武蔵国仙波
談義所（無量寿寺）をめぐる——」『中世文学』第五十一号
（二〇〇六年）

注9 築瀬一雄「梓弓の歌の伝承」『説話文学研究』（一九七四年、三
弥井書店）

注10 阿部泰郎「『直談因縁集』解題」廣田哲通・阿部泰郎・田中貴
子・小林直樹・近本謙介編著『日光天海藏 直談因縁集 翻刻と
索引』（一九八八年、和泉書院）

〔付記〕本稿は、伝承文学研究会第四四九回東京例会（二〇一八年四
月十四日、於学習院女子大学）にて担当した輪講をもとに成し
たものである。席上等において貴重なご教示を賜りましたこと、
深謝申し上げます。なお、本稿は、JSPS科研費・若手19K13079
「中世期から近世前期における平家物語にまつわる文芸領域及
び文化の動態に関する研究」の助成を受けたものである。

（もり さとこ・九州産業大学准教授）